



会社の窓

熊石事業所技師

材木谷敏秀さん



つくり育てる面白味

材木谷さんは熊石の出身、実家は地元で漁業を営んでいます。

小さな頃から魚が大好きで、しょっちゅう父親の船に乗せてもらっていた材木谷さんは、将来は親の後を継いで漁師になろうと、心に決めていたそうです。

「そのつもりで函館の水産高校に進んだのに、おやじにダメだ、安定した職業につけて反対されて、継がせてもらえなかった」

それでも漁業への未練は断ちきれず、何らかの形でかかわりたいと会社に入りました。

「職員になって6年。四六時中、勉強勉強ってかんじですね。採苗の

ときは、6年たった今でも毎回、産むまでソワソワと緊張します。アワビは言葉がしゃべれないから、とにかく観察するしかないです」

黙って見ても飽きない、毎日見るとアワビの様子が少しずつ分かってくる、つくり育てることの面白味みたいなものが実感できると材木谷さんは話します。

「今後の希望としては、アワビの需要がもっと伸びてほしいなということ、個人的には、いろんな魚種の勉強がしてみたいですね。」

アワビ母ちゃん

佐呂間漁協婦人部

部員数68人



婦人部長 住吉 露子さん

みんなで和気あいあいと、いつも楽しく活動しています。仕事も一生懸命だけど、遊ぶ方にはものすごく一生懸命です。うちは若い人が多いので恵まれてるなど感謝しています。

あなたのレポーター The Aquaculture

育てる漁業

平成12年6月1日
NO.325

発行所 / 北海道栽培漁業振興公社
発行人 / 佐藤政雄
〒060-0003 札幌市中央区北3条西7丁目
(北海道第二水産ビル4階)
TEL(011)271-7731 / FAX(011)271-1606
送金 / 信濃連の本公社口座(0018288)



カワヤツメ漁

カワヤツメは、海で生活した後日本海及びオホーツク海に注ぐ河川に遡上して産卵しますが、カワヤツメ漁が行なわれているのは、石狩川、尻別川、利別川、朱太川です。

この中で、最も盛んにヤツメ漁が行なわれているのは、石狩川と尻別川です。石狩川に内水面区画漁業権を持つ江別漁協では、毎年川面の結氷が流れ去る4月から12月まで13名の漁業者が、かや笠や網笠でヤツメ漁を行なっています。しかし、近年河川環境の悪化などによるものが、漁獲量が減少してきていますので、6月から8月の3カ月間休漁して、資源保護に努めています(写真は4月17日撮影)。

CONTENTS 目次

漁業士発アQUALチャーロード	2
佐呂間漁協指導漁業士 石川 勇さん	
栽培公社紙上大学 今月の講座	3 ~ 8
北海道南西部磯焼け海域における	
ホソメコンブ群落の造成手法	
留萌管内専務・参事会と懇談会を開催	9
栽培公社発アQUALチャーロード	10 ~ 11
水産協調型人工リーフの進展	
会社の窓 熊石事業所 材木谷敏秀	12
アQUAL母ちゃん 佐呂間漁協婦人部	12

金は大事に貯めて使え

佐呂間漁協の指導漁業士、石川勇さんは網走管内漁業士会の初代会長です。組織設立のため、先頭に立って奔走しました。

「うちの組合の当時の参事が先になって協力してくれた。まず会費取って、自分たちで積み立てて、組合とか役場を回って歩けて。創立の時は結構、大変だったよ」

平成3年の設立以降、網走管内漁業士会会長は、二代目が紋別の藤田孝太郎さん、三代目の現在は西網走の大高隆吉さんが務めています。

「おれが組織つくるから、後は藤田さん頼むよって。ひとり何かやったら一期か二期でやめようや、できる人がいっぱいいるんだから、いろんな人にやらせるべってね。藤田さんは漁業士会の植樹運動を軌道に乗せて大高さんにバトンタッチした。」

一期か二期で交代

組織の“長”は一人の人間が長い期間やらない方がいいというのが、石川さんの持論です。

「長くやるのもいいけど、後が困る。長くやれば当然、実力も増してそれ以上の人はいないわけだから、みんな自信がなくなってやれなくなる。青年部長をやったときも、みんなで経験すべきだって、おれの時代から一期か二期で交代するようにした」

石川さんは青年部長時代、学校の先生を頼んで複式簿記のつけ方の勉強会を開いたそうです。

「青色申告の始まりの時だったんだけど、そのころは自分で帳簿をつけられる人があんまりいなかった。女房を専従者にして給料払って経費にして。燃料代とか資材費、青色やると経費のことが良く分かる。経営に対する意識がみんな高くなったよ」

サラリーマンの経験で

石川さんはサラリーマン経験組。名古屋や東京で営業の仕事をしていましたが、昭和44年、実家を手伝うため、サロマ湖に戻って来ました。

「うちを継いでた兄貴が船乗りになっちゃった。ホタテ養殖が軌道に乗ってたときだったんで帰ってきた」

サラリーマンの時に学んだことは、あいさつと人に頭を下げること。自分の給料分だけでなく会社の分まで、人の倍働けという経営者感覚だと石川さんは言います。

「50才までに借金を返すって目標を立てた。資材入れたし、最初は赤字でやってたから生活資金も労務資金も借りてたけど、今は順繰りになってる。楽になったよ。子どもができたとき、仲人してくれた参事が毎月少しずつ蓄えろって、息子の名前で貯金通帳をつくってくれた。おかげで、東京の学校



佐呂間漁協指導漁業士 石川 勇さん

にも行かせてあげれた」

今の若い人は、金銭的な感覚が欠落してるかもしれないと石川さんは危惧しています。

「金に苦労した経験がないから、使いつぎに気づかない。パチンコやって何してもいいから獲った以上にお金を使うな。金は大事に貯めて使え、年間500万円以上の借金はするな。それ以上になったら繰り越すぞって、いつも若いやつに言ってる」

サロマ湖を大切にす

今の暮らしがあるのも、ホタテのおかげ。ホタテさまさま。そのホタテを育てくれるサロマ湖をこれからも大切にしていかなければならない。もちろん今でも守っているが、それ以上に厳しく、決まり事を守っていかなければならないと石川さんは言います。

「ホタテを育ててかれこれ30年。ホタテの気持ちにならなきゃいかんといわれるけど、この貝が生きるか死ぬか、何年たっても分からない。稚貝の採り入れも早くやるのがいいのか、遅くやるのがいいのか今でも分からない。最初習ったときと今では違うこともあるし、養殖といっても自然が相手。一生、研究が続くんだらうな」

北海道立中央水産試験場・水産工学室・生態工学科長
桑原久実
同上
・資源増殖部・研究職員
川井唯史

今月の講座

北海道南西部磯焼け海域におけるホソメコンブ群落の造成手法

はじめに

北海道南西部の日本海側では磯焼けが発生し、写真1のような状況にあります。キタムラサキウニが高密度に生息し、ホソメコンブ等の有用海藻がほとんど生育しません。このため、ウニ、アワビなどの餌料海藻が極端に不足し、成長や身入りが悪く、沿岸漁業に深刻な問題を与えます。

磯焼けの要因については、1)水温、2)栄養塩、3)ウニの摂餌などの説があげられています。私たちの研究でも、ホソメコンブの漁獲量は水温な

どの海洋環境に依存し、ウニの食圧が大型海藻群落の形成と密接に関係していることがわかりました。また、最近、ウニの食圧（ウニが海藻を食べる強さ）は、波浪や水温に影響されることがわかってきました。このように、磯焼け現象は、一つの要因による単純なものではなく、複数の要因が複雑に絡み合っています。

磯焼けの対策については、現在、主に海藻を繁茂させるため石材や囲いブロックの設置が行われています。しかし、設置直後は海藻が見られるものの、2～3年経つと元の磯焼け状態に戻る場合もあり問題で

す。上述したような磯焼けの要因を制御して藻場造成を行うことが考えられますが、水温、栄養塩は人為的に制御することが困難であり、ウニの除去は潜水作業を伴い多大な労力を必要とします。

磯焼け対策は、磯焼け現象のメカニズムを明らかにし、その中から人為的に制御可能なものを見つけだし、それに基づいて的確に行う必要があります。

このような背景から、私たちは、まず、磯焼け海域で何が起きているのかを良く理解するために、実海域で詳しい調査を行いました。ウニや



写真1 磯焼け海域の状況



図1 小樽市忍路湾の調査点

アワビの餌料となる海藻にはいろいろ種類がありますが、成長や身入りし易いものはホソメコンブです。このため、毎年ホソメコンブ群落形成する場所に注目し、その生育環境を解明しました。

次に、得られたホソメコンブ群落の形成条件に基づいて、次のような2つの磯焼け対策法を提案しました。

- 方法1：フェンスによる方法
- 方法2：嵩上げによる方法

ここでは、「磯焼け漁場有効利用技術開発試験」(平成9年～11年)で得られた藻場造成に関する研究成果の概要について説明します。

冬期の日本海は時化が多いので、

ホソメコンブ群落の形成条件

調査が可能なように、比較的波浪の

穏やかな小樽市忍路湾の湾奥に調査線(総延長57m)を設けました(図1)。ウニは個体数、海藻は種類を5mまたは10m間隔でSCUBA潜水によりほぼ月2回の頻度で調べました。波浪と水温の測定は、水深3mに設置した波高計(WE-7ルター)を用いて行いました。波による海底面付近の流れ(底面波浪流速)は、波浪データをを用いて数値計算から求めました。調査期間は、1998年10月27日～1999年10月5日の約1年間で

キタムラサキウニと海藻の分布(年変化)の状況を表1に示します。

キタムラサキウニは、夏は浅み、冬は深みに分布し、明確な深浅移動が認められます。海藻は、水深の浅

表1 キタムラサキウニと海藻の分布

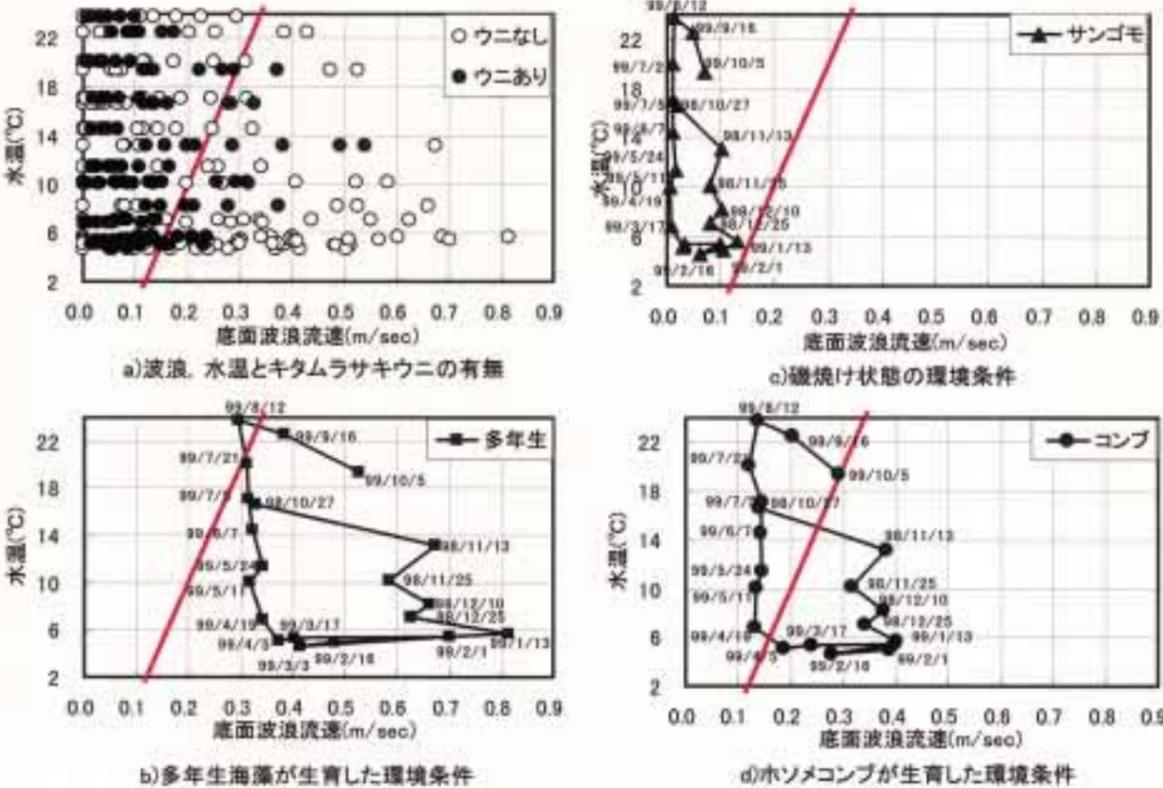
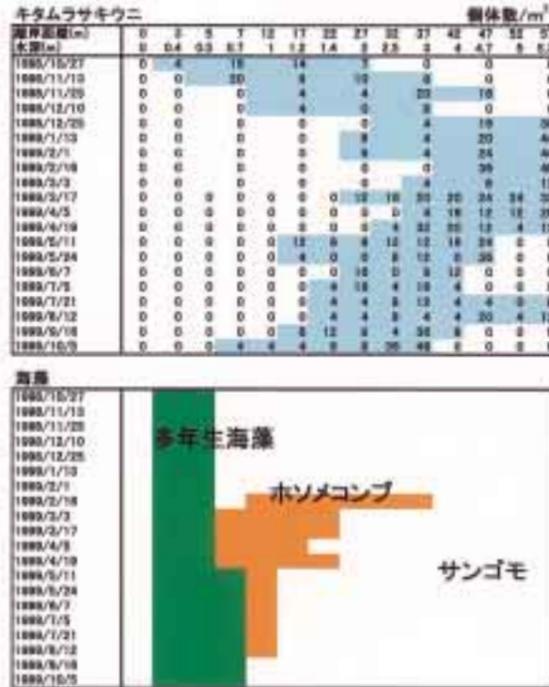


図2 波浪、水温、ウニ及び海藻の相互関係

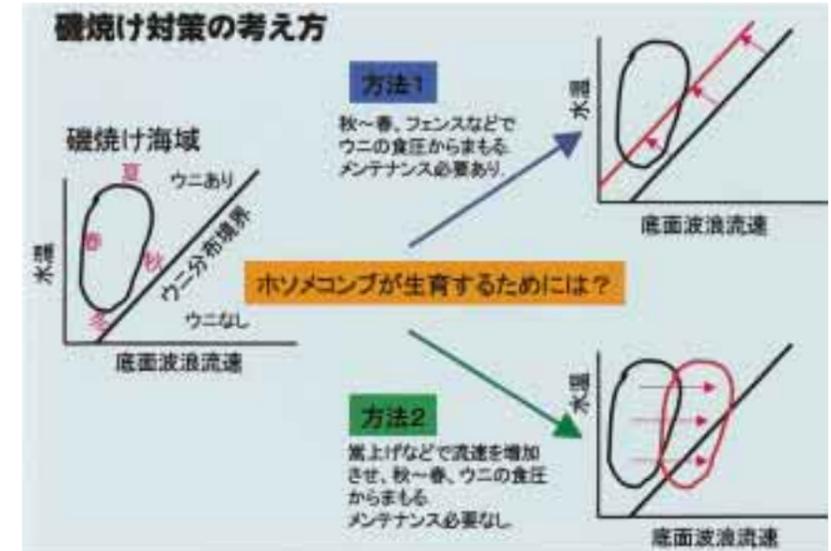


図3 磯焼け対策の基本的な概念

い場所は多年生海藻が生育し、次にホソメコンブが見られます。深くなると磯焼け状態にあります。

一般に、当磯焼け海域では、ウニが海藻の芽を食べることで磯焼けが持続しており、ウニが居ないと、ホソメコンブ等の1年生海藻からホンダワラ等の多年生海藻に遷移することが知られています。また、ホソメコンブの芽生えは冬で、ホンダワラは夏です。

次に、波浪、水温、ウニ及び海藻の相互関係について見ます。

波浪、水温とキタムラサキウニの分布を図2a)に示します。水温が低く、底面波浪流速が大きいとウニの分布が認められず、その逆に、水温が高く、流速が小さいとウニが分布することがわかります。但し、流速や水温からウニが分布する領域であっても海藻が密に生育することで分布しない場合が認められます。とりあえず、ウニが分布する領域としない領域のだいたいの目安をつけるため図中に赤い直線をひきました。

図2 b~d)は、順に、多年生海藻が

生育した場所、通年磯焼けでサンゴモが見られる場所及びホソメコンブが生育した場所の底面波浪流速と水温の年変化を示しています。また、図中には、キタムラサキウニの有無を示す目安線も併記しました。

多年生海藻は、ウニが分布しない流速の大きい場所に生育しています。このような場所ではウニの食圧がかからないため、海藻間に競争が起こり多年生海藻に遷移したものと考えられます。

磯焼け状態を示すサンゴモは、通年ウニが分布する流速の小さい場所に見られます。常に、ウニの食圧が作用しているためサンゴモしか生育できないものと考えられます。

ホソメコンブは、冬は流速が大きくウニが居ない、夏は流速が小さくウニの居る場所に生育していることがわかります。これは、上に示した多年生海藻とサンゴモの生育環境の中間的な環境といえます。冬にウニの食圧がかからないのでホソメコンブの幼芽が保護され、夏には、ウニの食圧がかかる



写真2 フェンスによる海藻群落の形成状況

ので多年生海藻への遷移が妨がれホソメコンブの生育環境が保証されているわけです。

磯焼け対策の考え方

以上の結果に基づき磯焼け対策の考え方を、図3に示します。

図中左に示すような通年ウニが居る磯焼け状態にある環境を、ホソメコンブが生育する環境(ウニが冬に居ない、夏に居る)に如何にして改善するかが、磯焼け対策のポイントとなります。現在、2つの方法を考えています。

方法1：冬、ウニ侵入防止フェンス内でウニが居ない、夏、ウニの侵入を可能にしたり、ウニをフェンス内に移殖してウニが居るようにします。この方法は、人為的な管理が必要となります。

方法2：嵩上げ等で底面波浪流速



写真3 フェンス内の海藻で身入りしたキタムラサキウニの出荷

を増加させ、冬は波当たりが強くウニが居ない、夏は静穏なためウニが居る環境が自然に形成されるようにします。この方法は、人為的な管理が不要です。

方法1. フェンスによる方法

小樽市忍路湾の湾奥で、ウニ侵入防止フェンスを用いたホソメコンブ群落の造成試験を行いました。ウニ類は海中にゆらゆらと漂うものに近づけない性質があるため、刺し網を棒網状にしたものをフェンス(渡島西部地区水産技術普及指導所などが考案)に用いました。

1997年11月末に10m×10mのフェンスを設置し、フェンス内のキタムラサキウニを除去し、試験の開始です。その後の経過を写真2で示します。1998年1月末には付着珪藻がフェンス内に認められました。その2ヵ月後の3月末には、フェンス内に限ってホソメコンブ群落が形成されました。フェンスの内外で、水温や栄養塩が異なるとは考えられません。異なるのは、ウニの食圧だけです。ウニの摂餌が、海藻の群落形成に大きく影響することが明確にわかります。

この様な試験は、忍路湾では2

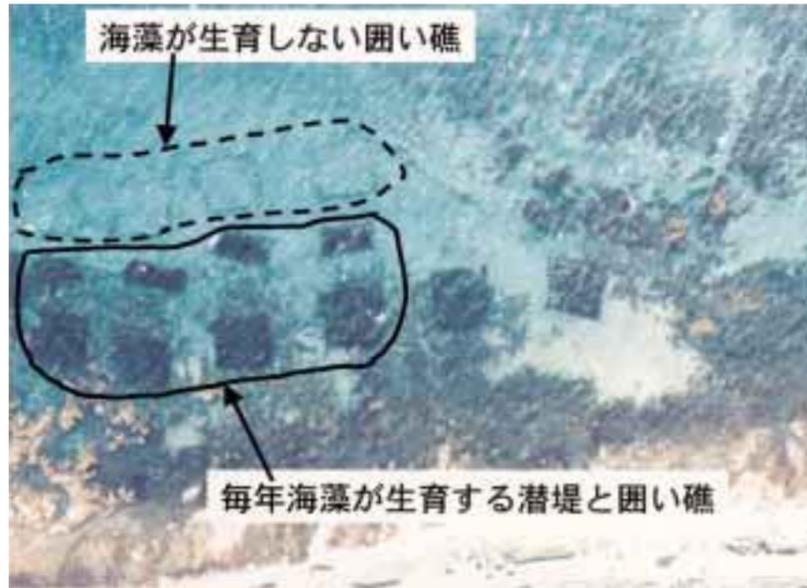


写真4 航空写真による寿都町美谷地区藻場造成施設の海藻分布(平成10年6月全振協撮影)

年連続して、外海に面した盃海域でも実施し、フェンス内だけにホソメコンブが生育しました。

周年ウニが分布する磯焼け海域において、冬にウニを除去すれば毎年ホソメコンブ群落が形成されることが明らかとなりました。

1998年5月上旬、フェンス内に形成された海藻群落内に身入りの悪い老齢キタムラサキウニ(水深約20mで採取、約8才)を收容しました。この時の生殖巣指数は6程度でしたが、3ヶ月後には15以上に達しましたので、漁師さんにも助けてもらい、生ウニの折り詰めを出荷することができました(写真3)。

フェンスを用いた磯焼け対策は有望ですが、実用するには、まだ、解決すべき問題があります。

フェンスの設置場所や水深によって、形成される海藻の種類や現存量が異なることがわかってきました。現存量の高いホソメコンブ群落が得られるように、フェンスの設置場所を評価する必要があ

り、現在、忍路湾湾奥で試験を実施中です。

現在用いている棒網フェンスは、静穏な海域では、網地にサンゴモが付着し硬くなると揺れが鈍くなりウニの侵入を許しますし、時化の多い海域では、簡単に破壊してしまいます。この問題については、平成12年度より「ウニ食圧制御機能を有する藻場造成施設の開発」による試験で新たな施設の開発に取り組みます。

方法2. かさあ 嵩上げによる方法

寿都町美谷海域に、藻場造成のための施設が設置(昭和57年~58年に施工)されています。航空写真で見た海藻の分布状況を写真4に示します。岸側の囲い礁と潜堤は、毎年ホソメコンブ群落を形成する施設で、このため黒く見えます。沖側の囲い礁は、磯焼け状態になった施設で、白く見えます。

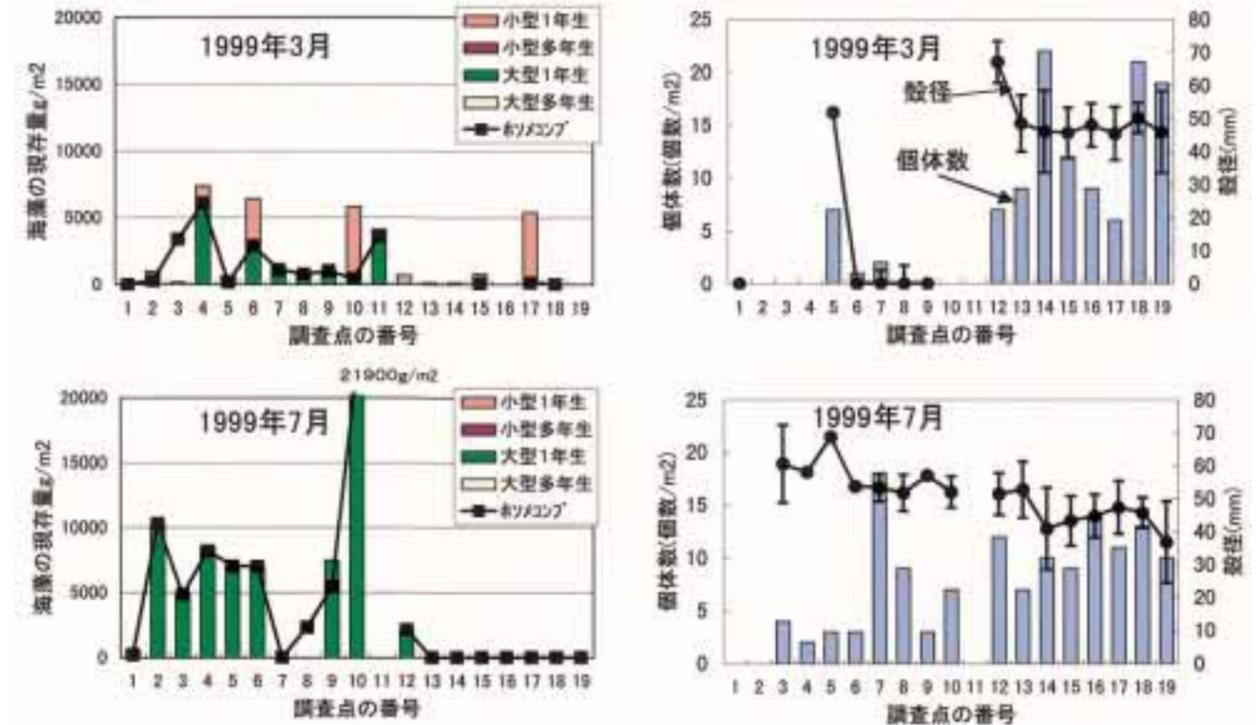


図4 寿都町美谷の藻場造成施設におけるキタムラサキウニと海藻の分布

これらは非常に近くにあるので、水温、塩分及び栄養塩などの条件は同一と考えられますが、海藻の生育に大きな違いが生じています。この原因を解明するために、現地調査を行いました。図5は、1999年冬(3月)と夏(7月)のキタムラサキウニと海藻の分布を示しています。沖側の囲い礁は、通年キタムラサキウニの個体数が多く、ほとんど海藻は見られません。岸側の囲い礁と潜堤は、冬、キタムラサキウニの個体数が少ないので、ホソメコンブの幼芽が保護され、夏、現存量の高いホソメコン

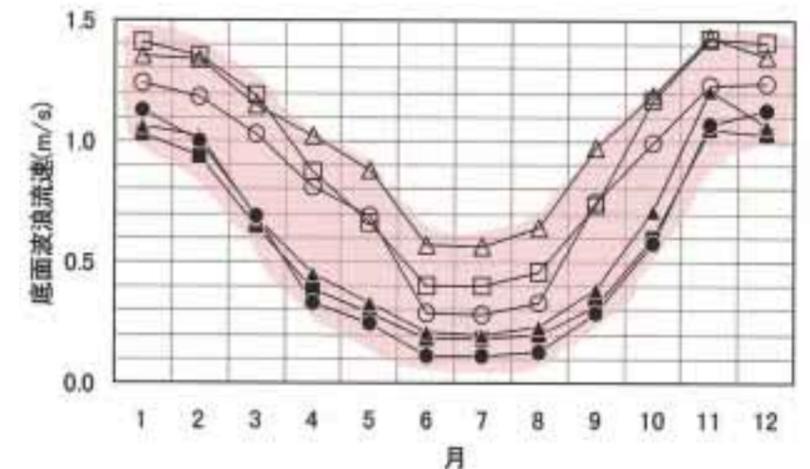


図5 藻場造成施設において7月でもホソメコンブが生育している場所の底面波浪流速(:野塚、 :美谷、 :有戸、黒は最小、白は最大値を示す。)

ブ群落が形成されています。また、夏には、ウニの個体数が増加しており多年生海藻の芽も食べ遷移が妨げられているようです。

藻場造成施設においても、ホソメコンブ群落形成される場所は、ウニが夏に居て、冬に居ないところであることが確かめられました。

この様に海藻群落の形成が大きく異なる原因として、波浪環境が考えられます。冬に波当たりが強くとキタムラサキウニが居づらな場所、夏は静穏でウニの摂餌が活発な場所にホソメコンブ群落が形成されるわけです。

それでは、どのような波浪環境にホソメコンブ群落が毎年形成するのでしょうか？

積丹の野塚、西河、寿都の美谷に設置された藻場造成施設の調査を行いました。7月でもホソメコンブ群落が見られた場所に注目し、その場の波浪環境を明らかにしたのが図5です。赤く塗った波浪流速で年変化する場所に、ホソメコンブ群落が形成されることがわかりました。

この結果をもとに寿都湾全域の波浪解析を行いホソメコンブが生育する場所とその水深を予想したのが図6です。この際、波は平均的な波を用いました。

波浪は主に、北西から来襲しますので、北に突き出した弁慶岬で波浪エネルギーは大きくカットされ湾内は静穏になります。このため図5で示した波浪流速を満たす水深は、磯谷や美谷付近の湾外では3~2m(赤~黄緑)ですが、湾

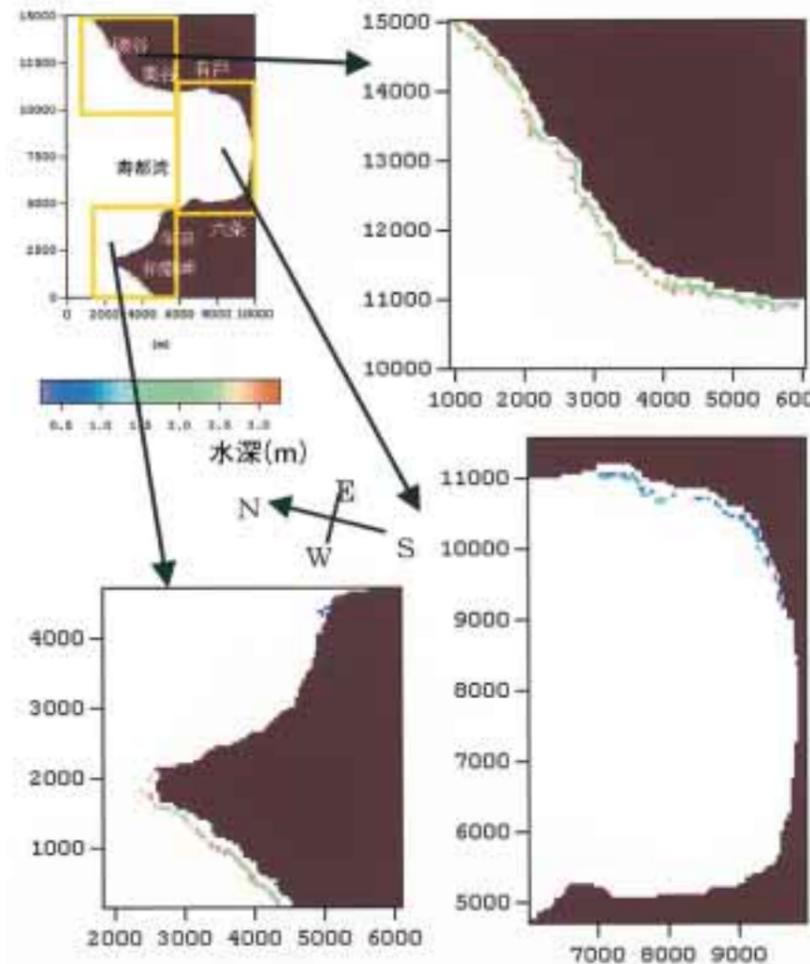


図6 ホソメコンブ群落が形成すると予想される水深(嵩上げ高さの算定)

内となるに従い浅くなり有戸では1~0.5m(水色~青)、六条や矢追では、あまり見あたりません。

この結果は、嵩上げ高さを算定する際にそのまま用いることができます。波当たりにより、嵩上げ高さを変える必要があるわけです。

現在、囲い礁など藻場造成施設の設計は、石材の安定重量が考慮されているのですが、ウニの食圧を制御し毎年ホソメコンブ群落を形成させるには、これに嵩上げ高さの算定を加える必要があります。

おわりに

以上の様に、磯焼け対策の考え方、そして具体的な方法について、ある程度明らかにすることができました。この様に順調に研究が進められたのは、現地の現象を良く見て、工学と生物の研究者が、お互いに理解し合いながら、両方の視点から出口を見据えて行ったことにあります。また、多くの方々の協力に支えられたからです。深くお礼申し上げます。

留萌管内専務・参事会と懇談会を開催 林副会長が講演、漁協との相互理解深める

栽培漁業振興公社では、昨年12月から根室、釧路、日高、胆振、石狩・後志の各管内専務・参事会と懇談会を開催してきましたが、5月に入って12日の渡島に続いて、15日午後留萌市の水産ビルで留萌管内漁協専務・参事会との懇談会を開催しました。留萌の懇談会では、各漁協の専務や参事をはじめ関係者約25人が参加、栽培公社の林副会長と富田指導部長、村上調査設計第二部長が、本道の栽培漁業の現状と今後の漁業展開や公社の栽培漁業関連事業・調査設計事業の実施状況などについて説明し、その後管内の栽培漁業の取り組み等に関して熱心に意見交換を行ない、公社と各漁協の相互理解を深めました。このあと懇談会は、5月16日に宗谷、そのあと網走で開催され、全道を一巡する予定になっています。

留萌管内の専務・参事会との懇談会は、成田邦好会長(初山別漁協専務)が「栽培漁業の更なる進展に向け、活発な意見交換を願いたい」と挨拶したのちに続いて、栽培公社の林和明副会長が「栽培漁業の現状とこれからの漁業の方向~地域の特性と漁協間の枠を越えた漁業の展開~」をテーマに講演。そのあと富田恭司指導部長が「公社の栽培漁業関



活発に意見交換をした懇談会



向かって右から専務参事会の成田会長、栽培公社の林副会長、富田部長、村上部長

連事業の実施状況』、村上一夫調査設計第二部長が『公社の調査設計事業の実施状況と概要』について、それぞれ説明しました。

この中で、林副会長は「これからの栽培漁業は、ホタテのように種類で漁家経済を支えるものは期待できないと思う。いかに複数の魚種を効果的に組み合わせるかが課題だ。種苗生産施設については管内全体で魚種選定や取り組みなどを話し合うことが大切で、また種苗生産から放流に至る各段階の課題を整理するとともに、モニタリング調査は漁業者の参加がぜひ必要。市町村や漁協が

入った形で経費の負担を話し合うことが望ましいし、事業効果を上げるために放流魚の保護対策などをしっかりやってほしい。この管内は、漁業者一人あたりの生産規模は低くないので、これからは高齢者の皆さんの生きがいや生産への参加をどうしていくか、あるいは中核を担う漁業者が農業のように法人化して企業性を持たせていくとか、さらに広域的な栽培漁業圏といった構想のもとに事業展開を図ることが必要ではないか」などと私見を交えながら話しました。

最後に、活発に意見交換を行なって相互の理解を深め、今後漁協と公社が協力しながら栽培漁業をさらに効果的に進めていくことを確認しました。



各漁協の専務、参事。左は指導連の中本教育部長

水産協調型人工リーフの進展

平成10年6月のNo.301号で「新たな漁場へ人工リーフの将来性」と題して、苫小牧元町地先で行われている海岸保全のための人工リーフ設置は、海岸保全と漁業振興が効果的に両立できるように漁業者の意見を聞きながら進められており、ホッキガイの増集、コンブの繁茂、魚類の増集などの効果がみられ、新しい漁場としての展望が開け、その中でも繁茂したコンブを餌料としたエゾバフンウニの種苗放流によるウニ漁業の可能性が高いと報告しました。その後人工

リーフは平成12年度には、2基目が完成し3基目の工事に取りかかる予定となっており、平成15年度までには3基が完成する計画となっております。

平成11年度まで実施されていた4年間のエゾバフンウニ5mm種苗放流による成長、歩留まり、採捕試験の結果から、放流から3年で殻径50mm程度に成長し、夏季の採捕では生殖巣指数が15%以上、放流後4カ年間の回収率は44.2%というデ



ータが得られたことから、12年度以降は、地元の苫小牧市、苫小牧漁業協同組合が主体となって、ウニ資源増殖の事業化に向けて新たな取り組みを開始します。

● 苫小牧元町地先人工リーフにおけるエゾバフンウニの人工種苗放流事業化試験

そこでこの内容と、平成12年度から着工することが決まった白老地先における水産協調型人工

リーフについて報告いたします。事業化試験は平成12年度に放流を開始し、採捕までの期間は3

年程度として、3回程度繰り返し、エゾバフンウニの成長、生残率、分布、生息状況そして、生殖巣の歩留まりについて調査するとともに、餌料となる海藻類（ミツイシコンブ等）の現存量や、分布の調査も並行して実施する計画となっております。そして、この調査結果にもとづいて生産コストと販売価格及び収益を算定し、事業化に対する総合評価を行い、今後は3基の人工リーフを利用したウニ漁業の事業計画を策定する予定になっています。

この事業化に向けての成否の最大のポイント



● 白老地先における人工リーフの着工

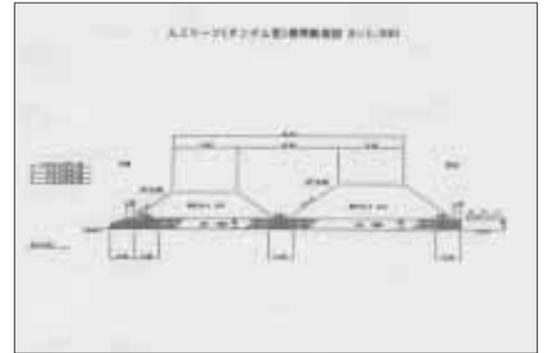
は、繁茂するミツイシコンブの量とエゾバフンウニ人工種苗の放流数、密度の関係をどうするかであります。試算では、ウニが漁獲サイズに達した後もコンブの群落が残し、身入りが期待できる放流数は、人工リーフ1基当たり数万粒と考えられますが、コンブの豊凶や夏季の高水温などの環境条件によって左右されるものと考えられ、今後も調査検討を続ける必要があると思います。

いずれにしても、砂浜域でウニが全く生息していなかった海域でウニ漁業ができるようになり、少しでも漁家経営の安定に寄与することができれば水産協調型人工リーフの成果として、良い前例となると思います。

また将来的には沿整事業とのドッキングも想定され、その進展が期待されます。

平成12年度には、白老地先における人工リーフ着工の白老漁業協同組合の同意が得られ、苫小牧元町地先と同様の

タンデム（2山式）リーフが1基目として着工されます。当会社では室蘭開発建設部の依頼により、苫小牧と同様に白老の人工リーフにおいても水産協調型を進め、設置される堤体の有効利用を含め苫小牧元町地先の人工リーフの設置の課程で得られた情報を有効に活用して、白老に



における水産協調型人工リーフの可能性を見極めるために各種の調査を計画しています。

苫小牧で有効であった手法が白老に適用することができるのかどうか最大の課題ですが、環境条件が異なるため、平成2年度からの調査によって得られた苫小牧のデータを解析するとともに、かなり大がかりな調査を計画しており、この中にはホッキガイ等の貝類調査、海藻類の繁茂状況、漁場の底質環境の他に、魚類の増集を想定した生息環境、底生動物（ベントス）仔魚、稚魚、水質の調査などを提案しております。このような調査結果と、過去の苫小牧などで行ってきた調査結果を踏まえて、白老の漁場環境に適した水産協調型を推進して行きたいと考えています。またこのような新たに創出された漁場の有効利用については地元の漁業者の理解と協力が不可欠であり、水産協調による海岸保全事業を実施してきた室蘭開発建設部の熱心な取り組みが実を結ぶよう、栽培公社としても全力で取り組む考えであります。

（調査設計第二部 次長 小形孝）

ニューフェイス

この春、本公社調査設計部にピカピカの新人、二名が入りました。皆さん、よろしくお願いいたします。



藤井 真
（北大大学院 地球環境科学 研究科修了）

まだ、分からないことがたくさんありますが、現場で先輩の話聞きながら勉強してがんばってまいります。



青木 梨沙
（北大水産学部 海洋生物生産科学科卒業）

学生の時、能取湖でホッカイエビの調査をしていました。河川については無知ですが、これから学んでいきたいです。